

学位論文要旨

児童の読書力を形成する
「読書日記指導」の理論と実践

広島大学大学院 教育学研究科 博士課程後期

学習開発専攻 カリキュラム開発分野

細 恵子

2015

■論文構成■

序章	研究の目的と方法
第1章	小学校・中学校段階における読書指導の現状
第2章	読書指導理論・実践の考察
第3章	読書力の検討
第4章	読書日記指導の構想に向けて
第5章	「読書日記指導」実践の実際（2012年度、第3学年）～4つの視点による指導と学級・個の変容、自分との関連づけ
第6章	「読書日記指導」実践の実際（2013年度、第3学年）～児童同士の交流～
第7章	「読書日記指導」実践の実際（2014年度、第1学年）～読書日記の導入、国語科「読むこと」との関連～
第8章	読書日記指導プログラムの構想
終章	研究の成果と課題
	参考引用文献
	巻末資料
	謝辞

■読書指導の問題・研究の目的

小学校学習指導要領解説国語編（2008）で、読書の指導については、読書に親しみ、ものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりするため、読書活動を「C読むこと」の「(2) 内容」に位置付けている。例えば、第1学年及び第2学年では、「楽しんだり知識を得たりするために、本や文章を選んで読むこと」、第3学年及び第4学年では、「目的に応じて、いろいろな本や文章を選んで読むこと」、第5学年及び第6学年では、「目的に応じて、複数の本や文章などを選んで比べて読むこと。」が「内容」として挙げられている。それを受けて多くの学校では、国語科の「読むこと」の単元に、指導要領の中に設定されている言語活動例を参考にして読書活動を取り入れることが多くなった。

しかし、現在の小学校における読書指導には以下の問題があると考えられる。

① 読書指導の目標について

国語科の「読むこと」の授業やそれ以外の学校生活の中で行われる多様な読書活動において、日常の読書生活に機能する力を明確にして指導することが十分できていない。「読書力」とはどのような力であるのかが曖昧である。

② 読書活動の内容について

読書活動に連続性、系統性は見られず、児童が読書のよさを実感し、自分の読書生活を高めていくことができるものになっていない。

③ 読書指導（一斉指導）の方法について（1）

読書活動の指導において、「読書力」を書くこと、話し合うことと関連させながら育てることが十分できていない。

④ 読書指導（個に応じた指導）の方法について（2）

児童一人ひとりの読書の課題に対し、個に応じた具体的な手立てをどのように講じ、それによっ

て児童がどのように変容したかについて明らかにしていない。

以上の問題から、本研究の目的を以下のように設定する。

- ①日本と海外の読書指導に関する先行研究を参照しつつ、日常の読書生活に機能する「読書力」を定義する。
- ②小学校教育で実践できる読書日記（年間を通して連続的・系統的に「読書力」を身に付ける読書活動、読書のよさを実感し、読書生活を高める読書活動）を開発する。
- ③指導の視点を明確にした「読書日記指導」、話し合う活動との関連を図りながら行う「読書日記指導」、及び読書日記を利用した個に応じた指導を筆者の担当する学級で年間を通して行い、「読書日記指導」で身に付く「読書力」を示す。
- ④筆者による「読書日記指導」の考察と他校の教師が筆者と同じように行った実践の考察から、小学校段階の「読書日記指導プログラム」（低学年・中学年・高学年）を作成し、提案する。

■研究の成果■

本研究では、4つの目的を設定した。以下、それぞれの目的がどのように達成されたかを述べる。

目的①について

日本と海外の読書指導に関する先行研究を参照しつつ、日常の読書生活に機能する「読書力」を定義する。

まず第1章では、学習指導要領（2008）の検討をし、読解と読書の位置づけを確認した上で、読む技術が明確にされていないという問題点を指摘した。読書指導に関わる実践書の検討においては、様々な手法が示されているが、読書指導が児童に十分浸透していない理由として、「なぜ、その活動なのか。」「なぜ、そのような手法をとるのか。」「その活動でどのような力が身につくのか。」について具体的に示されていないことや学習指導要領と同様に、様々な本や文章を読むための技術（読解力を含む）が要求されていないことを指摘し、理論とそれに基づく具体的な実践を示す必要性を述べた。

実際に小学校教師が読書指導に対してどのような意識をもっているかアンケート調査した結果、「時間の確保」「本の確保」「指導法の不明確さ」「個人差があること」を明らかにし、これらを解決するための読書指導をしていく方向性を定めることができた。

第2章では、従来の国語科の読む学習で行ってきた精読と、読書で行ってきた多読のとらえ方を野地（2005）と増田（2008）の論考から考察し、現在の読書指導の課題を解決するために、「精読と多読を統合した読書指導を国語科と日常で行っていくこと」や「精読と多読を統合し、自立した個性読みを目指すこと」、「テーマをもった多読を行い、書いたり話したりすることにより読む力を伸ばすこと」などが必要であることを示した。

ここまでで研究の視点①「読書力の明確化」、②「読書力の形成を目指す連続的・系統的な読書活動」、③「書くこと・話し合うことと結びついた指導法」、④「個に応じた指導法」を設定した。

海外と日本の先行実践を検討した結果、これらの視点に適合する読書活動として注目したのは、まず、アメリカのリテラチャー・サークルと大村（1984）の「読書生活の記録」であった。

第3章では、目指す読書活動で身に付ける「読書力」を検討していった。先行読書指導理論の研究から分類し、構造化した、古市（2011）の「自立的な読書人に必要な力や態度の構造」を基に、先行

研究・先行実践における読書力(昭和26年版学習指導要領、増田(1971)、嶋路(1974)大村(1984)、安居(2005)、吉田(2010))をさらに検討し、PISA型読解力との関連を図った上で、「読書技術(読書設計力・選書力・読解力<情報の取り出し・解釈・人物や作品に対する「熟考・評価」・自分と関連づける「熟考・評価」>・活用力)」、「読書活動に対する意欲・態度」、「読書習慣」という読書力を定義することができた。読書技術については指導過程に沿って分類し、「熟考・評価」については、読書の最終目的が人格形成であることを踏まえ、自分の内面を見つめることに焦点を当てられるよう、自分と関連づける「熟考・評価」を別に設定した。

目的②について

小学校教育で実践できる読書日記(年間を通して連続的・系統的に「読書力」を身に付ける読書活動、読書のよさを実感し、読書生活を高める読書活動)を開発する。

第4章では、目指す読書活動であるリテラチャー・サークルと大村(1984)の「読書生活の記録」を参考にした実践を行い、リテラチャー・サークルが研究の視点①～③に適合する活動であること、「読書生活の記録」を参考にして行った読書ノートが研究の視点①～④に適合することを明らかにした。これらの実践からは、「話す言葉はすぐに消えてしまうので、話し合いの過程の読解力については評価がしにくいこと」「話し合う活動においては、個の変容を捉えることができにくいこと」などの課題を指摘し、それらを改善できる書く活動のよさを明らかにした。

そこで、大村の「読書生活の記録」をさらに考察し、読書生活を高めるための「読書日記」を考案し、読書力に基づく朱書き、読書日記による交流、読書日記の活用を中心に、読書日記指導の目的・内容・方法を示した。また、読書日記指導の視点として、①「個に応じた教師の朱書き」(児童の身に付いた読書力を評価したり助言したり感想を深めたいことについて質問を書いたりすること)、②「児童の自己評価」(自分の読書生活や読書日記を振り返り、読書日記に自分の問題点や伸び、目標等について書くこと)、③「教師と児童との音声による対話」(休憩時間に本の選び方や読書に対する思い、読書の様子等について対話すること)、④「学級に対する教師の取り組み」(児童の読書日記を朝の会で読み聞かせたり、学級通信等で紹介し、読み合ったり、教室に展示し、読み合ったりすること)を設定した。

目的③について

指導の視点を明確にした「読書日記指導」、話し合う活動との関連を図りながら行う「読書日記指導」、及び、読書日記を利用した、個に応じた指導を筆者の担当する学級で年間を通して行い、「読書日記指導」で身に付く「読書力」を示す。

2012年度から2014年度までの3年間、読書日記指導を行った。

第5章では2012年度、第3学年に対して行った実践について述べた。4つの視点(①個に応じた教師の朱書き、②児童の自己評価、③教師と児童との音声による対話、④学級に対する教師の取り組み<児童同士の結びつき>)に基づき、児童一人ひとりの読書日記を分析し、個と学級の変容について考察した。その結果、読書日記は、視点①により、「児童の読む意欲や書く意欲を高めること」、「児童が読み方を意識して書くようになること」、視点②により「児童が、自分の読書生活の課題に気づき、目標をもって読書をしようとする事」、視点③により「教師が、読書日記に書かれていない児童の思

いを理解し、本の選び方や読み方を助言することができること」、視点④により「児童の読む意欲が高まり、児童から児童へ読書が広がること」を実証することができた。

また、この学年の児童の1年間分の読書日記を対象とし、「自分との関連づけ」の内容と、時期による「自分との関連づけ」の特徴、「自分との関連づけ」と解釈力との関係について分析し、日本ではまだ十分浸透していない「熟考・評価」の中の「自分との関連づけ」の力を具体化することもできた。

第6章では、2013年度、第3学年に対して行った実践について述べた。ここでは、読書日記指導の視点①と④に改善を加えることで集団での学び合いができ、多様な読み方が集団に広がるとともに、一人ひとりの児童の読書力の形成が期待できるのではないかと考え、実践を行った。児童同士が読書日記を読み合うという交流に焦点を当て、児童が友だちの影響でどのような読書力を形成していったかを考察した。実践結果から、読書日記による交流の効果を「児童に本との出会いを増やし、読書意欲を高め、読書の幅を広げる役割をもつ。」「教師対児童の関係で行う指導に比べ、児童同士が友だちの読み方、感想の書き方などを学び、認め合い、一人の読書力のみならず学級全体の児童の読書力を形成する。」と示した。

第7章では、2014年度、第1学年に対して行った実践について述べた。実践結果から、入門期において読書日記を国語科「読むこと」と関連づける方法について①「読むことの教科書教材で身に付けた力を読書日記で活用できるようにする方法」、②「読書日記で多くの児童ができるようになった読み方を次の読むことの単元で反復的に活用させる方法」、③ある児童の新しい読み方を読書日記で発見した後、それをみんなに紹介し、そこから他の児童へ読み方が広がっていった場合、読むことの学習に新しく取り入れる方法」を明確にすることができた。

3年間の実践で読書日記指導の視点①～④による指導を行うことや読書日記を国語科「読むこと」の授業と関連づけながら指導することにより、教師が指導しなくても自分の好きな本を選び、自分で読み方を選び、読書の習慣を身に付けること、つまり自分の方法で読んでいく個性読みが可能となることを実証することができた。

目的④について

筆者による「読書日記指導」の考察と他校の教師が筆者と同じように行った実践の考察から、小学段階の「読書日記指導プログラム」（低学年・中学年・高学年）を作成し、提案する。

第8章では、2012年度～2014年度の実践結果を踏まえ、読書指導の成果、読書日記指導の成果を明らかにしたうえで、「読書に関する目標」と「読書力」、「読書日記の指導方法」、「読書日記に書く内容」を示した、1年間用の読書日記指導プログラム（第1学年、3学年、5学年）の構想を示した。

目標、読書力、指導方法、内容のそれぞれにおいては、国語科「読むこと」との関連を図りながら系統的、螺旋的な指導ができるものになっている。

■研究の課題と展望■

最後に研究の課題と展望を述べる。

課題1 読書力の評価

読書日記から一人ひとりの意欲や読み方、考え方を捉え、具体的な評価をしてきたが、読みの質の評価の面では課題が残る。

国語科の共通教材で本を読む時以外は、一人ひとりの読む本は異なり、読んでいない指導者が読書

力を評価することには限界もあった。例えば、読書力の中のどれができているか、どのような読み方ができているかについては文章から理解できるが、その本における読みのレベルまでは十分に捉えることができなかつた。

現在、市販のテストは、文章から抜き出す問題が多く、情報の取り出しの力を評価するものがほとんどである。読みの質まで捉えるためには、共通の文章で筆者が定義している読書技術がどのようにできているかを評価できるテストが求められる。

今後、発達心理学の先行研究から発達段階における児童の読み、他者に対するものの見方、考え方、自己の内面のとらえ方等の特徴を考察し、解釈や「自分と関連づける【熟考・評価】」、「人物や作品に対する【熟考・評価】」の力等の評価基準について分析していく。そして、それらの力を伸ばすために、日本や海外の読書力評価を参照し、筆者の考える読書力を評価できるテストを開発していきたいと考える。

課題2 「読書日記指導プログラム」の系統性

本研究では、筆者の担当する第1学年、第3学年、第5学年の実践結果と他校教師の第5学年の実践結果をもとに、それらの学年における「読書日記指導プログラム」を作成した。

しかし、これらの学年の実践は二人の教師によって行われたものであり、データとしての実践数は少ない。また、本研究では、第2学年、第4学年、第6学年の実践結果は得られなかつた。そのため、限られた実践結果から指導プログラムが作成されていると言える。

本研究では、各学年での1年間において螺旋的な指導と系統的な指導を取り入れているが、第1学年から第6学年までの系統性は十分明らかにされていない。今後は、実践を幅広く集め、低学年、中学年、高学年で形成する読書力の重点指導事項を定め、系統的な指導と螺旋的な指導を明らかにする必要がある。

また、国語科との関連のし方、個性読みへ高めていくための指導過程など、さらに検討していく必要がある。

国語科との関連については、日常の読み方がどのように授業で活用されるのか、授業で学んだ読み方が日常の読書の中でどのように活用されるのかをさらに長期的に分析する必要がある。

本研究では、国語科や日常生活において精読や多読を取り入れることで、自分なりの方法で読書をして読書習慣を身に付けていくことができる（個性読みができる）ようになった児童もいるが、各学級の中で1年間を通してあまり変化しなかつた児童も数名いる。国語科で読み方を学んだ直後は教師の指導もあり、日常の読書でも関連した本を、学んだ読み方で読み、読書日記に書くことができるが、教師が指導・助言をしなければ、まだ自分で本や読み方を選ぶことや生活の中に読書を入れていくことが難しい児童もいる。これまでの筆者の実践では、真面目に話を聞き、教師の指導や友だちの読み方を素直に受け入れていく児童は、読書日記指導により短期で伸び、自分で読書を進めていくことができるようになっていった。このことから、まずこれらの児童の育成から、他の児童へ読書力を広げていくという見通しをもち、読書の課題をもつ児童が読書日記による交流を通して本の選び方や読み方を学ぶことができるようにしていく。このように読書に課題のある児童が個性読みに近づくことができるよう、指導の在り方をさらに検討する必要がある。